



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 加藤 誠
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

「共に生きよう！」

佐々木 恵
ささき めぐみ

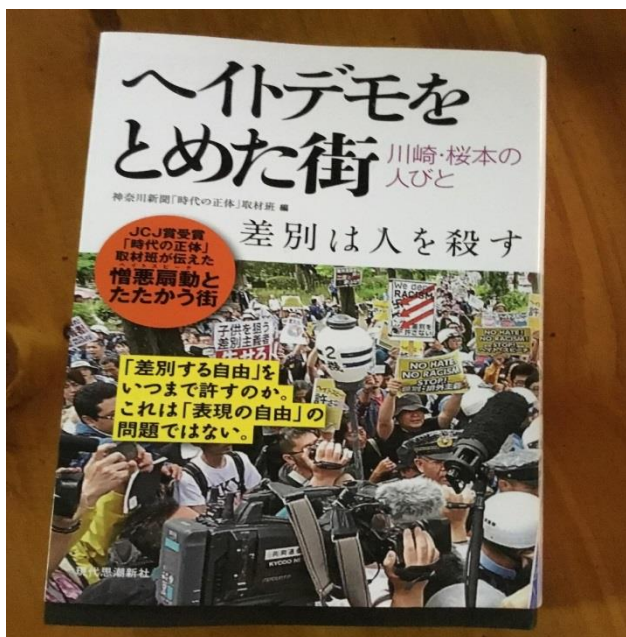
5月の20日から7月4日までルワンダを離れていました。5月28日の長男仁の卒業式に出席するためにまずアメリカに飛び、それから息子二人と一緒に日本に一時帰国しました。鹿児島の実家では、いつも東京で離れて暮らしている長女も合流し、鹿児島の母も一緒に屋久島に一泊旅行に出かけました。帰国直前の7月1日には、洋光台教会で日本バプテスト連盟神奈川女性連合の修養会があり、講師としてお話しさせていただきました。講師として大勢の方々の前でお話しするのは初めてのことでしたので、とても緊張して臨みましたが、この12年、ルワンダで経験したこと、ルワンダで出会った方々から教えていただいたことを整理し考え直すいい機会となり感謝でした。

さて、日本に帰った時に、『ヘイトデモをとめた街』（神奈川新聞「時代の正体」取材班編）という本を手に入れました。一年ほど前、川崎市川崎区桜本での在日コリアンの方々に対するヘイトデモと、それに対して立ち上がった地元の方々の活動を取り上げたニュース番組を見たのですが、そこで繰り広げられるヘイトデモの実態に心を痛めながらも、ヘイトデモに対して、差別に対して戦っておられる方々の姿勢に心を打たれ、希望をいただきました。正にその桜本の人々の戦い、挑

戦を取り上げたのがこの本です。特にこの本を読んで、番組でも取り上げられていた崔江以子（チェカンイヂャ）さんと息子さんの中川寧生（ねお）くんのお二人の生き方に刺激を受け、私自身の生き方を問われました。

崔江以子さんの長男、中学一年生の寧生くんは、「（ヘイトデモの参加者は）大人だから話せば分かってもらえる」と信じて、ヘイトデモに対する抗議運動に自主的に参加し、また、抗議集会などでも大勢の大人を前にして、泣きながらも自分の考えをしっかりと訴えてきました。その寧生くんの大人に対する信頼を裏切らないためにも、崔江以子さんはヘイトスピーチによって人間であることを否定されるような現実の中であってなお、希望を紡ぎ続けているのです。

崔江以子さんは「私たちの街、桜本は二度にわたるヘイトデモで傷ついているが、私たちはヘイトスピーチする方々を排除したいのではない。あの方々とも差別をやめればいつでも共に生きる準備はできている。特別なことではない」とおっしゃいます。私はここを読んで、ルワンダにおけるジェノサイド被害者のアグネスさんやサラビアナさんが、加害者の方々に語り続けてこられた言葉



を思い起こしました。「直接の被害者にまだ謝りに行っていない人は行ってください。必ず赦してもらえます。私はもう、七人赦しました。一人で行くのが怖いという人は私が一緒に行ってあげます」（アグネスさんの言葉）、「まだ謝りにきていない人は謝りにきてください。謝りにきてあなたの重荷をおろしてください。私には赦す用意があります」（サラビアナさんの言葉）。被害者側から加害者側に向けて語られる赦しへの、そして共生への招きの言葉です。そして崔江以子さんもヘイトスピーチに傷つきながらも、差別をやめれば共に生きる準備ができていると加害者にむけて招きの言葉を発しておられるのです。

実際、崔江以子さんはその後、ヘイトデモの主催者、津崎尚道氏に手紙をかきます。一部抜粋します。〈津崎さん、私たちは出会い直しませんか。加害、被害の関係から、今この時を生きる一人の人間同士として出会い直しませんか。加害、被害のステージから共に降りませんか。〉〈あなたがあなたらしく、私が私らしく生きられる、そんな地域社会を私は諦めていません。〉〈差別がなく、誰もが力いっぱい生きられる地域社会で私たちと共に生きてください。〉拡声器で「ゴキブリ朝鮮人を殺せ。」「半島、帰れ。半島、帰れ。」と声だかに叫ぶヘイトデモの参加者たち、その主催

者である津崎氏に手渡した手紙にはこのような言葉が綴られていたのです。ところで、このゴキブリという言葉は、23年前にルワンダで起きたジェノサイドでも用いられました。ツチ族のひとたちをターゲットにするために「ゴキブリどもを叩き潰せ」という言葉を用い、相手を一つのイメージに閉じ込め、人格を否定し、相手の存在を根こぎにしようとしたのです。そして攻撃する側にとってはこの言葉が、相手を攻撃することを正当化しようとする胡魔化しの言葉になったのです。

ヘイトデモは明らかな人種差別行為です。それを受ける人たち、そこに住む人たちを非人間化しようとする暴力です。そのうえ、ネット上の書き込みで崔江以子さんは名前をあげられた上で誹謗中傷され、命の危険さえ感じて、安心して日常生活を送ることもできないのです。明らかな人権侵害が横行しているのです。ヘイトスピーチ解消法が去年6月に施行されても繰り返されるヘイトデモ、しかし、崔江以子さんは、その暗闇のような現実の中であってなお、信じることを諦めません。

ルワンダで学んだことは、日本にある差別や抑圧に目を向けさせます。ルワンダで苦しんでいる方と同じように、日本でも苦しんでいる方々がおられる。辺野古で、高江で、桜本で、福島で、相模原市で、そしてその他の多くのところで……。しかしその方々が、暗闇のような現実の中でそれにしっかりと向き合い、逃げずに解決に向けて取り組んでおられる！信じることを諦めず、行動し、希望を紡ぎ出しておられる！私はこの方々たちに力をいただくのです。アグネスさんが、サラビアナさんが、そして崔江以子さん寧生くんが、私に生き方を問いかけてきます。私に傍観者として留まっていることをやめ、連帯するもの、共に声をあげ、行動する者となるようにと促すのです。そして、この方々たちが、共に生きよう！と招いてくださるのです。日本から遠く離れてルワンダに住んでいます、わたしもここで連帯し、声を上げ、行動するものになりたいです。

「平和のための同労者」

佐々木 和之

ささき かずゆき

PIASS から PUR へ

前号でお伝えした通り、私が勤める大学の名前が、Protestant Institute of Arts and Social Sciences (PIASS) から Protestant University of Rwanda (PUR) へ変更されました。今後は PUR への応援をどうぞよろしくお願いいたします。

先日とても嬉しい出来事がありました。それは「世界で一番新しい国」、南スーダンの独立記念日（7月9日）から二日後のこと。留学生のマシャールさんが他学生らの協力を得て、「独立記念祝会」を開くことになったのです。普段から一緒に食事をしている6畳間くらいの一室に、約25名の学生たちが集まりました。

会の初めにマシャールさんが立ち上がり、挨拶をしました。「私の国は20年以上の内戦の末、6年前に独立しましたが、残念なことに再び混乱状態に陥り、今年は独立記念式典を開けませんでした。しかし、私たちが独立によって勝ち取った自由を喜び、祝うためにこの会を企画しました」。そして、パソコン再生で南スーダン国歌の演奏が始まりました。学生たちは、マシャールさんに倣って起立し、胸に手を当てながら、神秘的な面持ちでその演奏を聴いていました。

やがてお待ちかねの食事が始まりました。ワイワイ、ガヤガヤと言葉を交わす彼らを見ながら、私もとても幸せな気持ちになりました。そしてその時とても微笑ましい光景を目にしました。ルワンダ人とコンゴ人の女学生たちがピッタリ体をくっつけ、後ろの者が前の者のお腹に手を回し、順番待ちのために並んでいたのです。ルワンダとコンゴ民主共和国は、過去10年あまり対立関係にあり、両国民間には根深い対立感情があります。ルワンダ政府が、自らが関与したコンゴ国内での深刻な人権侵害について否定しているため、ルワンダ人の学生たちがそれ



<憲法9条について学んだ6ヶ国の若者たち>

らについて公言することは困難です。お互いにまだ誤解もあります。しかし、彼らが共に暮らし学びながら、しっかりと友人関係を築いていることをこの目で確認したのです。

会が終わりに近づくと、コンゴ人留学生のニリンガボさんの、「自分たちの国、友人たちの国に持続可能な平和が実現するように、心の中で祈りましょう」、との呼びかけを受け、学生たちが輪になって手を繋ぎ、1分間の黙祷の時間を持ちました。ニリンガボさんは続けてこう祈りました。「南スーダン、コンゴ、ブルンジでは今も内戦や厳しい政治弾圧で人々が苦しんでいます。それぞれの国に平和をもたらしてください。ルワンダや日本には内戦などはありませんが、両国においても持続可能な平和が実現しますように。そして、ここに集められた私たち一人一人がそれぞれの国々の持続可能な平和の構築のために働いていくことができますように....」彼らが学ぶ平和紛争研究学科は、今から5年前、わずか6名のルワンダ人学生でスタートしました。それが今では66名が学び、うち21名はブルンジ、コンゴ民主共和国、タンザニア、南スーダン、日

本から来た留学生です。このコースを通して、対立する諸民族や国々から集まってきた若者たちが出会い、共に学びながら、アフリカ大湖地域の平和構築のために働く同労者としての関係作りを目指しています。主イエスが集められたこれらの若者たちのために、これからも続けてお祈りください。

ルワンダ大統領選挙

三日後の8月4日、7年ぶりの大統領選挙が実施されます。現職のカガメ氏の再選が確実視される中、過去3週間は連日、地方遊説に行く度に大群衆から熱狂的な歓迎を受けるカガメ氏の様子がメディアで報道されています。

かつて廃墟と化したこの国で、アフリカー安全と言われる治安、目覚ましい経済成長、女性の権利拡大等、特筆すべき社会改革を実現したカガメ氏の功績は高く評価されるべきでしょう。

しかし、カガメ政権の長期化を手放しで喜んでばかりはいられません。現政権による支配は圧

倒的で、実体の伴う野党は存在せず、政権批判を耳にすることは皆無です。独立したメディアも無く、国民は政府発表をほぼ鵜呑みにするしかないのが現状です。先日、政権与党の議員でもある友人が、「人々はいつもカガメ大統領の方ばかりを見ている。彼一人ではどうにもならないはずなのに。彼は神ではないのだから…」と話していました。大統領が神格化されつつあるのかもしれませんが。次回の任期が終わる2024年には、カガメ氏の在任は24年に達しますが、昨年の憲法改正により、2034年まで権力の座に留まることが法的には可能です。

現在の様な権威主義体制下での経済発展が持続可能なものなのか？絶対的権力の長期化が腐敗をもたらすことにならないのか？やがてより民主的な体制への移行が可能になるのか？

ルワンダで持続可能な平和への展望が開けるのには、まだ長い時間と取組みが必要です。お祈りください。(8月1日記)

事務局からのお知らせ

● 11月に佐々木和之さんは、PUR 平和紛争研究学科の卒業生と共に日本各地で、帰国報告会を開催します。ぜひ、ご参加ください。詳細は、次号のウブムエ(10月下旬発行予定)に掲載します。11月12日(日)沖縄、11月19日(日)午後洋光台教会、11月26日(日)午後姪浜教会(福岡)、12月3日(日)鹿児島などを予定しています。

● 今年3月にNHK BS-1で放映された佐々木和之さんのドキュメンタリー番組「明日世界が終わるとして」のDVDを貸出中。事務局の洋光台キリスト教会(蛭川明男牧師) TEL 045-774-9861にお申込み下さい。

● 佐々木さんを支援する会主催「ルワンダ第3回、和解の現場・訪問ツアー」を2019年におこないます。虐殺の現場を訪ね、その悲劇を心に刻みつつ、佐々木さんの活動現場を訪問します。ぜひ、今からご検討ください。詳細は、今後ウブムエ等で紹介いたします。

● 佐々木さんを支援する会主催 第二回「平和と和解・宣教フォーラム」を2017年11月17日(金)14時~18日(土)11時まで、「天城山荘」(伊豆市湯ヶ島2860-1 電話0558-85-0625)でおこないます。参加費は6,500円(一泊二食)。参加申込書を、FAXか郵送で、事務局長までお送りください。10月24日締め切り

● 事務作業簡素化のため「振替用紙」を同封しています。請求ではありませんのでご了承ください。

● 郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会 ●

● 佐々木さんを支援する会HP(ホームページ) <http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新。

● 世話人会 加藤 誠(大井教会牧師)、中條智子(長住教会牧師)、播磨 聡(広島教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、米本裕見子(日本バプテスト女性連合幹事)